毎月一回２０日発行　１９８８年５月２０日発行通刊第３１号

月刊 反トマホーク通信

No.31
88.5.20
定価 100円

〒150 東京都渋谷区渋谷2-5-9 パル青山502 トマ喰虫社 ☎03(498)6095
044(63)5101

（波に揺れるピースマーク）

海の軍備撤廃を

ブルーリッジの入港に抗議

反核と反原発　土井　淑平

トマホークの配備を許すな！全国運動

●維持会員（月間会費）
団体　1口　2000円
個人　1口　1000円

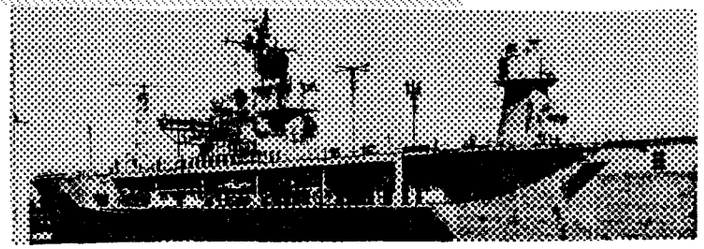
●参加会員（月間会費）
団体　1口　1000円
個人　1口　500円

●通信会員
年間
2000円

あなたも仲間に！

会費はすべて本紙購読料を含みます

核発射指令艦ブルーリッジ入港に抗議して都知事に申し入れ



加納　明（トマホークの配備を許すな！　首都圏運動）

寝耳に水の入港

東京港の晴海埠頭にブルーリッジが入って来る。この寝耳に水の情報が伝わったのは、連休を明日に控えた四月二十八日だった。

朝日新聞の三面記事と一部のTV報道によれば、同日、外務省を通じて米大使館から、横須賀に停泊中の米第七艦隊旗艦ブルーリッジ（都が受け入れた資料によれば排水量一八〇〇〇トン、全長一八六メートル）の東京港晴海埠頭への入港促進の依頼が到着。予定時刻は五月十一日午後三時入港で翌日出港。寄港の目的は「親善訪問」で、船上では関係者を招いてのパーティーも行われるという。

後日、私達は、港湾管理責任者である鈴木東京都知事が日米安保を理由に、その申し入れを受け入れたことを確認した。

東京港に外国の軍艦が寄港するのはこれが初めてではない。ここ数年間にも、フランスや西ドイツの練習艦がやはり「親善訪問」したこともある。しかしそれらの入港が単なるセレモニーであり、今回の現役米軍艦の入港とは全く異なる次元の問題であることは言うまでもない。

アメリカ第七艦隊、艦船七十数隻、将兵六万人以上を数えるこの戦闘集団は、西はインド洋の南端マダガスカル、南アフリカ沖から、東は北太平洋アリューシャン列島までを守備範囲とするアメリカ最大の艦隊である。ベトナム戦争から現在進行中のイラン・イラク戦争まで、およそアメリカの関与する紛争や軍事緊張にはすべて参加してきた。

チーム・スピリット、リムパック等、一連の合同軍事演習の最大の主役でもあり、核トマホークを中心とした破壊力と最新鋭の通信技術等により、その核戦争遂行能力は高まる一方である。その指揮艦ブルーリッジはボタンひとつで、まさに世界中をいつ核戦争に巻き込んでもおかしくない、指揮・管制中枢なのだ。

親善訪問とは

民間港の米軍や自衛隊による軍事利用の問題は、これまで私達が反トマホークの運動を進める中でもしばしば取り上げてきた。しかし、横須賀とは余りにも隣接した位置にある

東京港に、ブルーリッジのように大洋に頻繁に出港しているわけでもない艦が「補給と休養」で訪れるわけはない。「親善訪問」とはアメリカの艦船が同盟国の港を訪れる際のもう一つの目的。すなわち同盟国内における米国の政策をより強力に進めるための存在感の誇示、「シーフラッグ（旗見せ）」を意味するものに他ならない。また、横須賀で米軍が既得している軍港としての機能を、東京港や首都圏の港に拡大していくレールを敷くものである。

“とにかく東京で運動を進めてきたわれわれが中心になって何とかしよう”と声を掛け合い、週末の五月七日、鈴木俊一知事に受け入れ撤回の申し入れを行う運びとなった。文面を確認する余裕がなかったにもかかわらず、三～四日の間に首都圏や京都、広島など二十一団体が申し入れに賛同することで一致した。この日のためにはるばる駆けつけてきてくれた京都トマ連の林さんをまじえ、都民四名と神奈川県民一名の計六名が都庁へ足を運んだ。

米軍艦船が日本の港に寄港する際の手続きは、日米地位協定に基づく合同委員会の合意により、海上保安庁を通じて港湾事務当局に通報される仕組みとなっている。事務当局の管理者としては当然に都の港営部長、港湾局長がおり、最終的には東京都知事の認可が下らなければ当該の船は入港不可能なのである。

同様なシステムは他の道府県についても設けられており、知事の判断が入港を中止に導いた例もある。

八五年一月、富山県富山新港に米潜水艦ダータが寄港したい旨の要請があった。富山の港は商業港としてソ連船の出入りも多く、事故が心配される。中沖同県知事は海上保安庁を通じて外務省に対し、米軍当局に寄港中止を申し入れてくれるように伝えた。しかし、外務省は、「日米安保に基づき入港するもので拒否する理由はない」との一点張りで応じようとしなかった。

困り果てた知事側が、神戸の米領事館と直接交渉した結果、日米親善友好にヒビが入らないことを確認した上で、寄港中止となったのだ。さらにさかのぼれば八三年、戦艦ニュージャージーが横須賀のみでなく横浜にも寄港したい旨が明らかにされた際、長州神奈川県知事らは、非核三原則を守るべきとの立場であったため、寄港申し入れすら正式にはできなかった実例がある。

都庁の無責任さ

申し入れの対応に出た港湾局総務部長と港営部長の両氏は、いずれも東京都として寄港を拒否することが可能であることを認めながらも、「外務省の意向を尊重する」の一点張り。受諾の経過についても、四月二十八日に外務省から申し入れがあり、五月二日に既に

受諾の返事を伝えてしまい、審議の中味は一切公開されず、事後報告として都庁詰めの記者に短信で公表されたのみであった。

明らかに「シーフラッグ」の目的で寄港しようとする艦を受け入れることは、米核戦略への明確な加担ではないかとただせば、「見解の相違である。加担と思わない」と居直る有りさまであった。われわれは今回のような事態は決して見過ごすことはできないため、何度でも訪れる旨を伝えて都庁を後にした。

当日の入港の様子については、別稿に譲るが、申し入れの当日七日夜、「非核の海へねじをまこう！5・7集会」に参加したメンバーのかなりの人が、入港日夜の行動に駆けつけてくれた。都知事は都民にずい分と忙しい連休を過ごさせてくれたものである。

ちなみに、船上でのパーティーについては、確認のできた範囲だけでも都知事、都議会議長、都港湾局長、それに港のある中央区長に招待状が来ていたが、港湾局長以外は全員欠席で代理も立てない形となったそうである。微力ながらも短期間で出来る範囲のことに取り組んだ成果であろう。

今回の事件は、海を中心とした核軍拡が、横須賀、呉、佐世保、そして三宅島に限らず、首都東京の中央部にまで及んでいること、そしてそれに反対する取組みは東京都を現場として考えても成り立つことを改めて教えてくれた。私達の住む、最も身近で、最も大きな自治体である東京は、プラスもマイナスも含めた可能性のるつぼであるのだ。

ドキュメント
ブルーリッジ入港

東京港が、晴海埠頭が、第七艦隊の指令室になる！米第七艦隊旗艦ブルーリッジの入港を目撃したとき、そう実感した。五月十一日午後三時、警視庁や海上保安庁の船に守られながら、ゆっくりと入港して来たその姿は、何とも不気味な“浮かぶアンテナ群”であった。

組合で監視しようと決めて晴海埠頭へ向かった私達は、埠頭の展望台まで来るのにも随分と手間どった。展望台には艦船マニアや観光客ら約七十名がいたが、同数前後の制服、私服警察官に出迎えられた。たまたまポールを所持していたのを見るや、「入れるわけにはいかない」と言われた。仲間の一人が社会党員証を見せると、突然対応に変化が起き、めでたく（？）ブルーリッジに対面することができたのだ。

とにかく今は、この船をよく見て目に焼き付けようと思った。アンテナのどれかが本国からの指令を受け、他のいずれかでペルシャ湾や太平洋上の艦船に指令を送り続けているのだから……。港湾管理者は、そのあたりをどう考えているのだろうか？

さて、昼間は見本市の大変な人出で混みあっていた埠頭周辺だが、夕方になると警備陣がやたら目立ち始めた。どう見ても過剰だ。軍隊を警察が守るとは、事実上の戒厳令だ。彼らにとって、船上パーティーという“親善”の目玉商品はこれからなのだろう。六時になった頃、高級車やタクシーで次々に招待客が

訪れる。彼等のみが唯一“親善”の対象なのかもしれない。後に聞いた話では、東京都知事や中央区長も招待されたが、欠席したそうだ。理由はともかく、そんなパーティーに喜んで出席する首長はあってほしくない。

ところで、それらの流れとは別に、私達は、都内や他の首都圏から集まった仲間と合流して二十数名で、“We don't welcome Blueridge”の横断幕を広げようと試みたが、バス停あたりで行く手を阻まれてしまった。これも後でわかったことだが、このバス停の位置すら海岸近くから内陸へと、勝手に移動させられていたのだ。

車道上から私服警官らが私達をとり巻くように写真を撮りまくる。周囲をぐるりと取り囲まれ、壁ぎわに押され、二時間近くも何の説明もなく拘束されるという事態となった。事実上の監禁だ。すぐ近くの船からはバンドの演奏が流れていた。同じ船内の一室では、いつでも核攻撃の発信が出来る体制になっているのだろう。常軌を逸しているとしか思えない光景だ。二度と再び繰り返されてはならないものである。

明日もまた、晴海は見本市でにぎわうのだろうか。

（S・O）

資料

外務省から都庁への申し入れ

「米国の権利が円滑に行使されるよう確保する条約上の義務を負っています……当該寄港が支障なく実施されるようよろしくお取り計らいを……」

北米保第350号
昭和63年4月28日

東京都港湾局長殿

外務省北米局安全保障課長

米軍艦船の本邦寄港について

今般、在京米国大使館より当省に対し、来たる5月11日から12日の間に予定されている米海軍艦ブルー・リッジの東京港寄港についての手続きの促進方依頼がありました。

米軍艦船は、日米安全保障条約及びその関連取極に基づき我が国の港への出入りを認められており、我が国としては、かかる米国の権利が円滑に行使されるよう確保する条約上の義務を負っております。従って米軍艦船の本邦寄港に関する通報が港湾管理者に対してなされた場合には、当該寄港が支障なく実施されるよう、よろしくお取り計らい願います。

なお、日米地位協定に基づく合同委員会での合意により、通常、米軍艦船の本邦寄港の際の通報手続きは、海上保安庁を通じて行われることとなっているので申し添えます。

東京都 63.4.30 港営港第　号 港湾局港営部 港営課

ピーススピリット イン・ひろしま

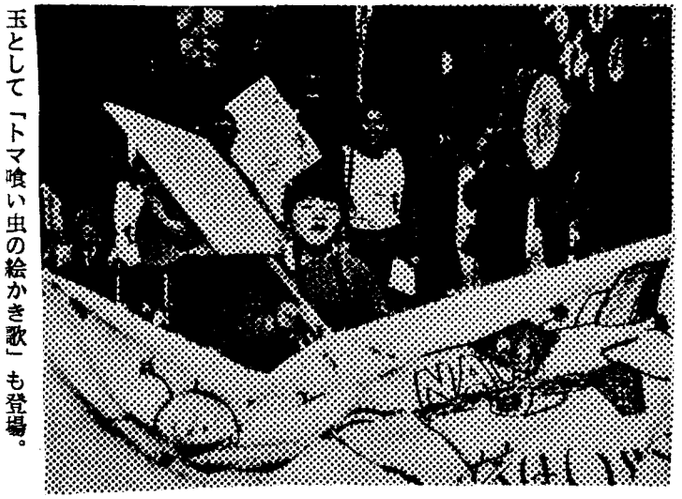
林　修二

（ストップ・ザ・戦争への道ひろしま講座）

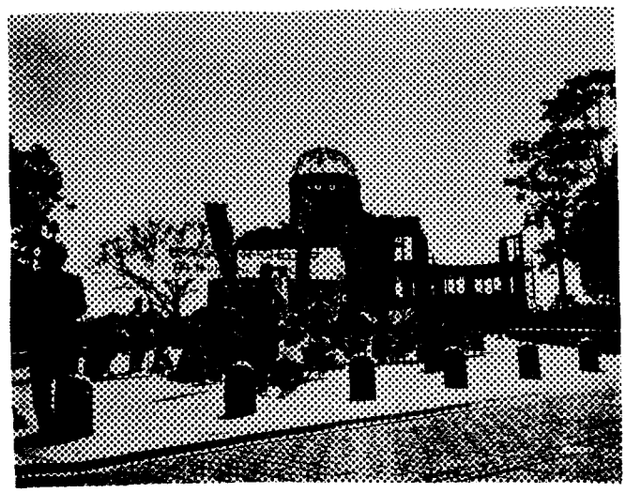
四月十日、昼一時からの市内ビラまきから行動が始まる。二時からは昨年の五・三一と同様、原爆ドーム前で座り込みを始めた。フアイフ、バンカーヒルを前面に出しながら核にまみれた状況を「ヒロシマ」から訴えていこうと約四十名の参加者だ。老若男女様々な人々が集まった。

核艦船入港問題については、呉市はもちろん、広島県、平和都市を世界に向けて標ぼうする広島市も、情報収集さえ不十分なあきれた対応だ。広島の運動の中でも、決して盛り上がっているとは言えない。この状況に何とか食い込んでいこうという「88ピーススピリット広島行動」＝呉―広島―岩国＝の一環である。

この日、平和公園は花見客で大にぎわい。呉からのメンバーは弁当持参で花見をかねての余裕の参加、なかには、当然、花見もかねてやるのだろうと楽しみに参加した酒愛人もいた。残念！歌やスピーチが次々と続き、目玉として「トマ喰い虫の絵かき歌」も登場。言いたい放題で、予定の時間があっという間に過ぎた。



三時半からはデモ。コースはアーケードのある繁華街の往復。春の陽気に誘われて、びっしりの人出。実はこのデモには私達の高度な戦術が隠されていたのだ。そうそのとおり、一緒に歩けば、誰がデモ参加者で、誰が通行人かわからず、ごちゃごちゃ。ええい！みんなデモ隊。人波をかき分け、かき分けデモ隊はすすむ。ゆっくりすすむデモ隊にとうとうしびれを切らして、七～八人の子供部隊が先頭を追い越してどんどん前へ、ある母親、「プラカードをもっているので、迷子の心配はないねえ」。



デモをやり終えて、解散地点のすぐ側のあの中曽根句碑前で気勢をあげ、解散。どうもご苦労さん。

ひき続いて五月五日の岩国、五月二十二日の呉も頑張ろう。

6・18 トマホーク神奈川県民審査会開催（連絡先 ○四五・二二二・二二七三）

5月25日 朝日新聞

足もとからの核軍縮

第三回国連特別総会を前に

◀中▶

「ピース・ウオー（平和運動）」と「内部の対立」さ

二月中旬、真夏のニュージーランド・ウェリントン。「太平洋軍縮セミナー」の会場になった国立大学の教室で、約百五十人の運動家を前に、来日経験があるという米国人が、いったん合わせた両手を離すしぐさを見せながら、そう答えた。

テーマは、北西太平洋での軍拡をとどめ食い止めるか。日本周辺の海の核戦力増強が焦点になり、質問が飛び出した。「それで、日本の反核運動はどうしているのか？」

教室の片隅にいた平和交流の船、ピースボートのメンバー、高橋亜弥子さん(26)は、思わず顔を伏せた。

＊……＊

一九八二年の第二回国連軍縮特別総会（SSDⅡ）から六年。日本の平和運動は内側から揺れ通しだった。原水協内部の対立（核戦力）はすべて無去される。ことに決まった。しかし、海の原水協と原水禁の対立も深刻化し、世界大会は、統一から十年目の八六年夏、再び分裂開催となり、いまもその状態が続いている。

その間、去年十二月の米ソ軍縮交渉で、陸上のINF（中距離核戦力）撤廃が合意され、ヨーロッパ、アジアの核ミサイル「トマホーク」が、軍縮の一途をたどっている。

八四年　一〇八発
八五年　一八三発
八六年　二八一発
八七年　三一八発

市民グループが入手した米軍会資料は、水上艦船や潜水艦から発射される核装備可能の巡航ミサイル「トマホーク」が、年々と調達される状況を示している。四年後には、いまの倍以上、七五八発に達する。その多くは、ソ連領内が射程内の北西太平洋に配備される。

"トマホーク一発の威力は、広島に投下された原爆の約十五倍に当たる。

核戦争の「切り札」といわれるトマホークの配備が始まったのは、八四年から。トマホークを搭載できる艦船が、ひんぱんに日本に寄港しはじめた。米海軍は、ことし秋には、駆逐艦と巡洋艦を新しく横須賀を母港に配備する、と発表した。その二隻で、トマホークは約七十発積載できるとされている。

「横須賀、佐世保、沖縄……。米国が手放せない戦略拠点は、ソ連から見れば、先制攻撃の目標になる。米国にとって、日本列島はソ連の太平洋進出を阻む『防波堤』。米核戦略の最前線として、戦争に巻き込まれる危険は増すばかりだ」と、軍事評論家の前田哲男さん(62)は指摘する。

「被爆国として、核廃絶を訴えることは大切だ。でもそれだけで十分だろうか。足元から軍縮を実現する、具体的な運動に取り組むべき時期が来ているのではないか」

＊……＊

横浜市郊外の学習塾に、この二カ月間、トマホーク艦が寄港する可能性のある横須賀、佐世保、呉の三地区から、地形や人口分布、公共施設の配置状況、気象などの精密データが次々と送られてくる。塾長の梅林宏道さん(36)がそれを英訳し、さらに国際宅配便で米国・カリフォルニア大学の生物学者、ジャクソン・デイビス博士に送りつける。

博士は一昨年、トマホーク搭載艦艦ミズーリ号の母港化計画が持ち上がったサンフランシスコで、核弾頭事故を想定した環境被害予測を研究、公表した。

――停泊中の船が火事にあい、積んでいた二発の核弾頭が燃えるだけで、放出されるプルトニウムに被ばくした住民が、七十一万九百四十七人の範囲でがんで亡くなる。市民は全員緊急避難。市街地の汚染を取り除くには数百億ドルの経費がかかり、事実上、廃都となる。

「核アセスメント」の結論は、サンフランシスコの住民たちに衝撃を与えた。

＊……＊

「チェルノブイリ原発事故で、だれもが核の恐ろしさを身近なものと実感した。自分たちの住む地に集中的に配備されたINFに焦点を絞り、撤去を実現したヨーロッパの運動に学びたい」

梅林さんらは二十四日、神奈川県庁の記者クラブでこの計画を発表、トマホーク配備阻止を県民運動に広げていきたいと強調した。

その基礎資料ともなる日本の三港についての「核アセスメント」の分析結果は、SSDⅢに合わせ、六月半ばにはデイビス博士を招いて公表することにしている。

核アセス

トマホーク艦の横須賀母港化に反対する署名を呼びかける市民グループ＝22日、神奈川県横須賀市の京浜急行横須賀中央駅前で

「事故あれば」 身近な実感に

5/25 朝日

反原発と反核

―四・二三セミナー「海のチェルノブイリ」より

土井　淑平（反原発交流会・鳥取）

四・二三～二四の「原発とめよう一万人行動」の関連企画として四月二十三日セミナー「海のチェルノブイリ」が行われた。以下は同セミナーでの提起である

核兵器と原発のからみあい

私はどちらかと言いますと反原発の活動をやっていた人間で、反原発の活動に関わって十三年ぐらいになります。

最初は九州の川内原発建設計画をめぐる住民運動に関わって、そこで反原発の活動のなかでオルナタティブテクノロジーのはしりのような試みとして風車づくりをやりました。現在は自分の地元である鳥取県で、ここに中国電力の青谷原発計画というのがありまして、この計画を阻止する運動に関わってもう八年ぐらいになります。これは未然に防いで作らせないという状態をつづけています。そういう活動をしながら、呉の湯浅さんたちと中国地方の住民運動のネットワークがございまして、正確に言いますと中国地方反原発反火電等住民運動市民運動連絡会という長ったらしい名前のネットワークがあって、そのネットワークにも関わっています。

今日ここにお集りの皆さんは、どちらかと言うと反核あるいは反トマホーク、反基地のような活動を中心にやっておられる方が多いのではないかと思いますけれど、私は今自己紹介しましたように反原発の方をやってきまして、反核については反原発の活動を通してむしろ関心を持ってきた人間です。そういう意味では反核の運動なり反基地・反トマホークなどの運動をやって来た皆さんからむしろ私が学びたい方です。

私のテーマとして、「反核と反原発」、あるいは核兵器と原発のからみについて、時間の範囲内で私の考えを述べさせていただきたいとおもいます。

原発は原潜の転用物

皆さんご存じかと思いますが、私たちの常識になっているわけですけれど、原発というのは原爆から生まれてきた、これは間違いない歴史的事実ですね。ヒロシマ、ナガサキに投下されました原爆、これはアメリカのマンハッタン計画という原爆製造計画がございましてナチスより先に原爆を作れという至上命令の下に進められた計画です。この計画の総指揮者というのは、アメリカ陸軍のグローブスという将軍でした。グローブス将軍が指揮をしまして原爆製造を進めたわけですね。その経過からしましても原発は原爆の副産物として生まれたと言えるんですが、より正確には原潜の副産物ないしは転用として原発が開発されたということが言えるかと思うんです。

戦後アメリカは冷戦下でもう一つのマンハッタン計画を進めました。もうひとつのマンハッタン計画というのは原子力潜水艦を作る計画でして、この計画は、最初のマンハッタン計画がグローブスという陸軍大佐によって進められたとするならば、リコーバーという海軍大佐が指揮しました。アメリカの軍隊としては陸軍が原爆を作るなら海軍は原潜を作る、というわけです。

このリコーバーという海軍大佐が指揮した計画で最初に作られた原潜はノーチラス号で

す。これが五五年に進水してますね。ところがこのリコーバー海軍大佐は、もう一つ計画をした。つまり原潜のための原子炉と同時にもう一つ作ったのは原子力発電のための原子炉だったんです。一九五七年ペンシルバニア州のシッピングポードというところの原発の原子炉を作ったのがこのリコーバーです。

ですからこういう出自からしまして、原子力発電というのは原潜とへその緒が切れない、表裏一体というか原潜の転用と考えていいと思うんです。そういう意味で原発と原潜というのは、アメリカの軍産複合体の象徴的存在と言えるかと思います。このあと、原子力発電が商業化、あるいは産業化されていくわけですね。そういう由来からしても、核兵器と原発、あるいは原潜と原発というのは全く双生児ということなんです。

缶詰社会

表裏一体と私は考えるんですけど、ところが必ずしもそう考えない人もいまして、最近私はある政党の機関紙から若干批判されています。私が、核兵器と原発は双生児である、反核・反原発は一体の課題であるという主張をしているんですけど、それに対してそれは非常に特異な議論だ、核兵器廃絶は全人類的課題であるのに対して、原発というのは今は安全性にちょっと問題があるけれども、原子力の平和利用は否定できない、科学技術の進歩と発展は否定できない、という形で私を批判してます。

しかしこれは私は、とうてい受け入れられない議論ではないかと思うんです。単に原発が原潜の転用である、というだけではなく、よく考えてみますと現代技術の非常に多くのものは戦争と軍隊から来ていると思います。例えば、私たちが今、インスタント食品をよく食べます。びん詰めとか缶詰とかもそうですね。これはナポレオン戦争の時に発明されたと言われてます。それから冷凍や保存の技術というのも、軍隊の補給の必要から生み出されたという事実があります。それから今私たちが使っています家庭電気製品ですね。例えばエアコン、これも実は、全部軍艦から来ている。現在日本の大手家電メーカーは皆、よく調べてみると軍需産業、兵器産業を同時にやっています。

左手で家電、右手で軍需産業という感じでやっているんですね。これも今の、軍艦から家電が来たということと複合する象徴的な事例だと思うんです。今缶詰の話をしましたけれど、原潜とか原発の原子炉は、ある意味では石油の缶詰だと言えると思うんです。これは私が言ってるんじゃなくて、槌田敦さんがそうおっしゃいます。原発というのは石油の缶詰なんだと。そういう缶詰にして原潜を動かしている。原潜にとっては、缶詰というのは非常に役に立つとおっしゃってますね。

石油の缶詰ということは、ある意味では人間を缶詰にすることによって、そういう缶詰社会が出来てるんじゃないか、という風にも見れる。原発がある社会というのは原子力潜水艦そのものに段々似てきていると思います。原潜社会というか。原発社会をプルトニウム社会と言う人もいますが、同時に原潜社会と言った方がいいかもしれない。原子力潜水艦によく似ている。

原子力潜水艦の中では、缶詰のような人間、軍隊のヒエラルヒーに沿った指揮と命令によって動く缶詰のような人間でないと、ああいう潜って閉じ込められた社会は運営できない。同じようにそういう缶詰のような社会を、全社会に押し及ぼすのが原発のある社会とも言える。最後には、環境と人間全体を、放射能の缶詰にするとも考えられる。

日常の中の戦争

そういう意味で私は、原発のある社会は原潜社会として、原発が戦争経済と軍隊から来ているように、実は単に由来からしてそうであるだけじゃなくて、原発というのが私たちの一見平和な日常生活の中にある戦争をも意味するんじゃないか、そういう視点が必要ではないかと思うんです。これは単に二年前に起きたチェルノブイリの事故がまさにもう一つの核戦争という様相を呈した、ということだけではなくて、原発の立地地域でいろんな住民運動が起きてます。これはある意味で日常の中にある戦争状態だし、資本と国家によって天から原発計画を押しつける、それをめぐって激しい攻防がが起きます。放射能汚染のこと以前に、問題は地域社会の平和や家庭や人心をズタズタにします。原発立地地域の激しい攻防戦を展開している所ではどこでも、これ自身が犯罪ではないかと思います。これ自身、日常の中にある戦争状態である、という見方も出来るかと思います。

そういう日常の中にある戦争状態を、眼に見える形で大規模に、地球的規模で示したのがチェルノブイリの事故だった。チェルノブイリの事故については、ソ連のゴルバチョフが、「チェルノブイリの事故は、もし核戦争が起きたらどんな悲惨なことになるかを示した」と言っています。しかしそうではない。私たちは、核戦争に至らずともも一つの核戦争のような悲惨な状態をなめなければならない、と言い直さなくちゃならないと思います。

チェルノブイリの事故の影響はここで報告出来ませんけれども、全世界的な食品汚染の現状、あるいは今後ガン死が百万人以上出ると報告されています。色んな予測がつかないかたちで、影響が今後幾世代にもわたって出る。

原潜は動く原発

チェルノブイリの事故で私たちが改めて気づかされたのは、先ほど原発は原潜の転用だと言いましたが、ということはある意味では原潜は動く原発、動きまわる原発と考えてもいいんではないか。もちろん原潜の原子炉は原発よりは規模は小さい。しかしながら動き回る原発＝原潜ととらえると、たとえば横須賀に原潜なり原子力艦船が入港するということは、動く原発が東京湾に入ったり出たりすることを意味する。

原子力発電所の事故が起きるということは、当然原潜でも事故は起きるわけですね。現に起こっています。原潜の事故なり核兵器の事故は細かく調べればとんでもない事故が幾つも起きてます。誤ってB52が水爆を落したり。例えば一九六六年、スペインのパロマレスという所で、B52が空中給油機と衝突して水爆を四個落とした。これを私たちはあまり知りません。知らないというのは、爆発しなかったということですが。

原潜では一九八五年に大西洋バーミューダ沖でソ連の原潜が火災事故を起こした。この火災事故は核戦争の引き金になりうる事故であったと当時言われました。原潜が事故を起こせば、放射能を撒き散らすと同時に偶発的な核戦争の引き金になりうる、という怖さを持っている。核戦争は現在、偶発的に起きるということが重要だと思うんです。また、原潜の事故では、つい今年二月十五日の新聞に出てました英原潜あわや核事故という記事。イギリスの原潜が基地に停泊中、冷却装置の故障が起きてあわや核事故ということになりました。

ということは、たとえば横須賀に原潜なり核艦船が出入りするとそのような事故の危険性も持って出入りする、と言えるわけでして、ある意味ではこの東京湾に動き回る原発が出入りすると考えられる。そうしますと、もし

原潜の事故が起きるとこの東京の一千万の住民にとって決して安全とは言えない。

反核と反原発の違い

私はそういう意味では、原発と原潜、原発と核兵器を表裏一体のものとして見る眼が必要ではないか、ということを言いたいわけですけども、ただし歴史的にも技術的にも経済的にも、原発は核兵器あるいは原潜の転用であり副産物であり、表裏一体であると言えても、これまでの反核運動と反原発運動が一体のものとして展開されて来たわけではないことは皆さんご存じではないかと思います。

反核運動は日本の場合は、ヒロシマ、ナガサキの体験をへて原水禁運動という形でスタートして、それから反原発運動の場合は、それぞれの原発立地について個別の住民運動として、立地を阻止する闘いが組まれてきました。反原発運動というのは、三十六の原発が作られていますけれども、しかし実はつぶしてきている方が多いんです。八十何カ所あった原発建設計画のうち、作られているのは十カ所、十一カ所ぐらいです。あとはみんなつぶして来ている。

反原発運動は個別住民運動としてはあちこちで勝ってきている。反核運動と反原発運動の違いというのはそのへんにあると思うんです。原発の場合は原発の立地を、首長なり漁協なり主権者が承認権なり拒否権を持っている。ですから個別の立地を阻止することが出来る。しかし、反核の場合は、基地にしても核配備にしてもトマホークにしても、国家政治、国際政治が上から天孫降臨のように押しつけられる中で拒否権がない。ここが反原発と反核の一つの違いではないかと思うんです。

チェルノブイリ以後、原子力発電所というのはもう一つの核戦争を意味する、潜在的にその可能性を持っていいるということを示しました。私はチェルノブイリの事故でこう考えます。反原発運動はこれまで個別地域住民運動として展開されてきた。これは高く評価すべきだし、それによって日本の原発をたくさん止めてきた。しかし同時にチェルノブイリによって、今や日本中が原発現地である、と考えざるをえない。ヨーロッパの地図を日本にあてはめると、みんな汚染地域どころかチェルノブイリの近くにすぐ入っている。日本中が原発現地だ。したがって個別の原発立地を阻止するだけじゃなくて、今や日本中の原発を問題にしなきゃならない。日本中の原発を止めないとチェルノブイリの二の舞になる。現に最近次々にいろんな事故が起きています。

そういう意味で、全国的な規模の運動が必要になっている。今日、明日の一万人行動はその一歩だと思うんですけど、同時に反原発運動は反核という視点も捉えていかなきゃいけないと思います。それは先ほど言いました原潜、原発は表裏一体であるとか、あるいは現在世界的に核兵器の拡散が原子力発電という形で進行している、という事態がある。あるいは、最近アメリカなんかで原発から出来るプルトニウムを軍事に利用するという動きもあります。

初心に帰って……

そのような事情から、私たちは反原発に反核という視点が必要です。三十六基の原発だけじゃなくて、同時に日本の近海を動き回って出入国している動く原発としての原潜を問題にしていかざるをえない。

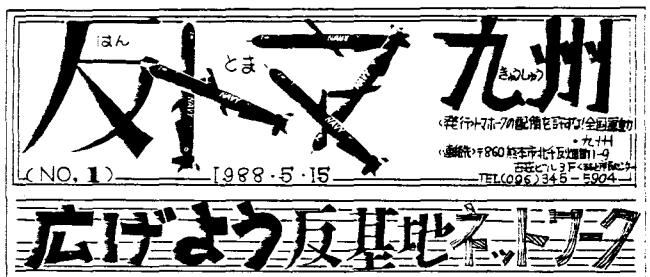
と同時に、反核運動も反原発を基軸に据えないといけないんじゃないかという時代に入ってると思います。反核運動も、もともとは杉並の主婦が始めた運動だったんです。杉並の主婦の署名運動から始まったんです。

考えてみると、そういうことが多いんです。米騒動も富山県の主婦が始めた運動です。つい最近の、伊方原発の出力調整実験に抗議する大行動も大分の主婦が口火をきった。そのように原水禁運動も、もともと草の根から始まった。そういう意味でもう一度初心に帰る必要がある。

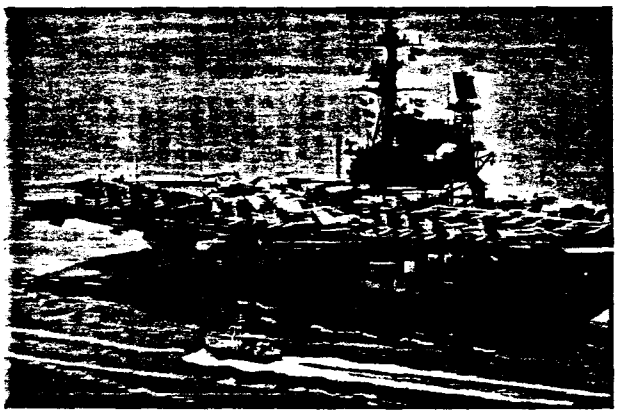
同時に原潜も「動く原発」という視点から捉え直して「海のチェルノブイリ」「空のチェルノブイリ」もありうるということを心にとめて、取り組まなければいけない。プルトニウム空輸なんかは空の「チェルノブイリ」という危険性を持っています。そういうことで日常の生活に身近な存在として原潜や核兵器をもういっぺん捉え直す視点と活動が必要ではないかと考えます。

反トマ九州発刊

九州の仲間が隔月刊の情報紙「反トマ九州」を発刊しました！　連絡先 096-345-5904
（くまもと市民センター）



広げよう反基地ネットワーク



米空母ミッドウェー　佐世保入港（'88.4.7）写真提供 長崎新聞

させぼレポート

今年五月、第三回国連軍縮総会（SSDIII）を前に行われる米・ソの首脳会議は、昨年のINF全廃条約について戦略核兵器の三割削減を課題としており、全世界から大きな期待が寄せられている。

ところが、こうしたかってない軍縮の時代を迎えつつあるのに、アジア太平洋方面では、海洋INFをめぐる米・ソのせめぎ合いが一層し烈になっている。

特に日本への米潜水の寄港が激増し、今年になって既に（四月一〇日現在）横須賀一四隻・佐世保一三隻・沖縄一四隻の計一一隻ものりそのうち、九隻が核トマホーク搭載または疑惑艦である。

ところが佐世保に入港したホークビル（一一・二）やボギー（三・一一）の例にみられるように、事前通告上の違反、事後通告の不明確さなど看過できない問題が、横須賀、沖縄でも相次いでいる。

財政危機は依然悪化しています。会費を！カンパを！

会計報告

(88.4.20~5.20)

〔収入〕

○前月からの繰り越し	△616,431
内訳「経常繰越	△190,431
内訳「借入金繰越	△426,000
○会費収入	61,000
内訳「維持団体	28,000
内訳「維持個人	6,000
内訳「参加団体	0
内訳「参加個人	7,000
内訳「通信会費	20,000
○カンパ収入	71,000
○反核ホットライン収入	9,990
○在庫売上	9,000
計	△465,441

〔支出〕

●家賃	40,000
●電話代	6,810
●郵送費	63,160
●文具	700
●印刷費	12,000
●反核ホットライン経費	1,960
●手数料(郵便振替)	1,590
●次月への繰越	△591,691
内訳「経常繰越	△165,691
内訳「借入金繰越	△426,000
計	△465,441

月刊反トマホーク通信　No 31
一九八八年五月二〇日発行
＊発行　トマホークの配備を許すな全国運動
〒一五〇東京都渋谷区渋谷二―五―九パル
青山五〇二　トマ喰い虫社
☎〇三（四九八）六〇九五
〇四四（六三）五一〇一
＊編集　反トマホーク通信編集委員会
＊定価　一〇〇円（通信会員年間二〇〇〇円）